

豊竹座退轉とその後

始祖越前少掾の末路

さて一方東の芝居の若太夫こと後の豊竹越前少掾の主宰する豊竹座の方はどうなつてゐるかといふと、既に前條義太夫旗上げ當時に記したやうに、豊竹若太夫が義太夫の門から分離して、此座を築き上げたのだが、以來久しく竹本座と對立して、ボロも出さず一座を支へて來たことを思ふと、若太夫の非凡な腕前が、出雲と比べて好敵手であることが知れる、また藝道の上にも、恐ろしい美音の持ち主で巧緻を極めた名匠であつた。元來此人は竹本の流を豊かに語るといふ意で豊竹と名づけたほどで、世間からも、古今マカンの優れた美音は此人を置いて外になしと云はれてゐるくらゐ、豊艶華麗な聲と節とに恵まれ、従つて後年に及んでも、竹本座の勢力と相伯仲して人氣を持続することが出來たのである。この人も政太夫と同じやうに、大阪船場の産れて、河内屋勘左衛門と云つた豪家だつたのだから、座主と金主、太夫、作者をまで兼

ねた三面六臂で、而かも八十四歳の高齡を保つたといふのだから、随分珍しい幸運兒だと云つてもいい。ところが此人も竹本座二代の座主竹田近江のやうに、晩年は殊に豪奢を事とした上に天災に見舞はれて、やはり同じやうな終末をつけてゐるから不思議である。前段のことは省



豊竹派始祖前少掾の像

くとして、豊竹座退轉當時の狀況をすこし述べて置かう。その前にこの座も竹本座の國性爺のやうに、寶曆七年十二月「祇園祭禮信長記」を出して三年越しの大當りを取り、なかなかの全盛ぶりを見せてゐたことを記憶して置いて貰ひたい。それが僅か數年後の寶曆十一年二月と、十三年一月の兩度、類焼に遇つて芝居は全焼、居宅も土藏まで焼いて失ふといふ慘澹たる光景である。如何に富有的な生活もこれでは聊かまゐらざるを得ぬ、銀七百貫目の損害だといふのだから可なり大きい。日々の驕りを極めた生活の上へこの火災だから、さしもの若太夫こと越前少掾家も餘程傾いたに違ひない、さうして此禍ひの三年目明和元年九月十三日、八十四歳をもつて他界した。以前享保九年の大火

後、直に道頓堀嵐の芝居を買収して、豊竹座を新築し、次第に全盛を極めた此人が、寶曆の火災が原因で遂に家も命も滅ぼしたので、火事で成功して火事で亡くなつたといふ不思議な因縁である。おまけにこの家の跡目を襲いだ倅の豊竹甚六、これが名の通り惣領の甚六で、財政の整理をするどころか、藝術などのことは微塵も念頭にかける心がけはなくて、道楽三昧に日を送り、殊に茶道に耽溺し三百兩もする高價な茶碗を他人に見せて誇つてゐるといふやうな人物だつたから、父の死後程なく家財は人手に渡り、續いてさしもの豊竹座までも明和二年八月三十日をもつて閉鎖するの止むなき悲運に陥つてしまつた。

更に豊竹越前少掾の最後にまつはる、一つの因果話がある。

伊丹の里の酒造家に稻寺屋といふ豪家があつた。數奇を極めた宏壯な居宅は、主人の好みに任せてあらゆる贅がつくされてあり、殊に庭園の布置は一木一石にも心をこめて作られてあつたが、さてかうなると、なんでも珍らしいもの、珍らしいものへと嗜好が馳つて行つて、日本に一つ或は世界に一つといふやうな珍品を、見たり聞いたりするたびに手に入れたいといふ、型の如き金持心理に捉はれて行つたものと見える。ところへたうとう主人の所有慾を満足せしめるに充分なものが、こゝに一つ手に入つて來た。それは、大和の在原寺に古く寺寶として置

かれてあつた例の有名な業平の井筒である。伊勢物語に「筒井筒いづつにかけし……」と詠まれてゐるその由緒深い井筒が手に入つて來たのである。銀四枚で寺僧から譲り受けたのであるが、これなら日本はおろか世界中にも二つとはないのだから主人は大喜びに悦んで、これを自宅の庭園に据ゑつけて人々に誇つてゐた。ところが間もなく、此井筒の祟りだといふのでさしもの稻寺屋も瞬く間に亡びてしまつたのである。その後三十年の星霜が經つて、この稻寺屋の屋敷跡の茫々たる草つ原に、この恐ろしい名残りを物語つてゐる古井筒が草に埋れてたゞ一つ抛り出されてあつた。その古井筒に目をつけたのが越前少掾である、さういふ故事來歴あることを知つてか知らずにか、越前少掾もやはり稻寺屋の主人のやうな金持心理をもつてゐた上に、淨瑠璃に縁の深い井筒業平の昔を偲ぶ心からも、殊に茶道に心酔してゐる絶頂とて、この寂びのついた古井筒を、茶室の庭に移して見たくて堪らなかつた。そこで後繼者の人から二十兩といふ代價でこれを買ひ取つて、當時三津八幡宮の近くに隱居所を持つてゐたから、伊丹から引き取つて、その庭園へ据ゑつけたのである。井筒の祟りはこゝでもう一度その魔力をあらはして、程なく前記のやうに越前家をめちやめちやに叩き壊はして、赤い呪ひの舌を出したといふのである。もとより迷信、取るに足らぬ傳奇物語の一つではあらうが、この傳説の井筒

が、どこをどう廻つて來たのか、現在では大阪第一流の某富豪のお庭に、チャンと納まりかへつて現存してゐるのは、傳説以上の珍談ではないか。

この豊竹座の座附作者として、從來その名を残した紀海音の略歴を簡単に記して置く。

榎並氏、喜左衛門、後に善八と云ひ、父は鯛屋善右衛門とて菓子商。兄は有名なる狂歌師、油煙齋貞柳。善八寛文三年に生れ後ち俳諧を貞室に學び、大和柿本寺の僧となり、或は醫となり、梨沖に従ひ國學和歌に遊んで後ち遂に若太夫の爲めに豊竹座の作者となる。竹本座の近松と相對して生涯を淨瑠璃の作に貢獻する處多い。「心中涙の玉の井」「八百屋お七歌祭文」「油屋お染袂白綾」「心中二つ腹帶」等有名なる作その他多し。寛保二年十月四日歿す、八十歳。

明和二年七月二十五日初日、道頓堀東の芝居、即ち豊竹座では、豊竹應律その他の合作で

「内助手柄淵」(松田和吉作「河内國乳母火」の改作物)が豊竹鐘太夫、駒太夫、麓太夫、三味線鶴澤重次郎、同寛治、同名八、人形若竹伊三郎、豊松藤五郎などといふ顔觸れで出てゐる。

この狂言が、名作だつたわけでもなく、市中の人氣を湧き立たせたわけではないから殊さら此處へ引例するほどの淨瑠璃ではないのだが、わざと引き出して來た理由は、實はこの狂言を最後として、名譽ある道頓堀豊竹座が退轉の止むなきに至つたといふ、淨瑠璃史上の記録に止む

べき事柄であるからなのである。

明和元年九月十三日、座主豊竹越前少掾死すると共に、驕奢生活に憂き身を寢してゐた越前の惣領息子甚六は、天晴れ豊竹座を繼いで行かねばならぬ身でありながら、たうとう經營難といふ反對の結果を招いて、翌二年八月三十日を名残りとして、哀れや豊竹座は人手に渡つてしまつた。元祿十五年五月、義太夫の門下から脱出し、西の竹本座に相對峙して、東に豊竹座の櫓を掲げ、豊竹一派を高唱して、操り芝居の覇を稱へた六十四年の光輝ある歴史はこゝにはかなき没落を告げたのであつた。もちろん此没落は惣領甚六の、其人で無かつたのが直接原因ではあるが、その後二年四ヶ月を経た明和四年十二月には、西の竹本座も同じ退轉の憂き目に遭つてゐるのだから、操り芝居の一轉機に際會してゐたと見ることが出来るのである。かういふ次第で、歌舞伎やその他の興行物に蠶食せられてゐた状態は、この豊竹座の跡が、その十一月にはもう、妻川菊八の歌舞伎芝居、顔見世興行といふことに變つてゐるのを見ればすぐ了解が出来ると思ふ。

さてその後の豊竹座一派の人々は、どういふ行動をとつて來たか、明治維新に至るまでのその動靜を窺つて見ることにしたいと思ふ。

巨城豊竹座は見事に崩壊したが、城は崩れても、操り芝居その物はさう簡単に滅亡はしない。國亂れて忠臣現はる、といふこともある。豊竹派を永く後世に傳へる爲めに、この没落の悲報を聞きつけて、直ちに駈けつけた豊竹派一方の旗頭二代目豊竹此太夫は、急遽その善後策を謀つたのである。此太夫は實はかうしたお家の大事が起つてゐるとは知らず、かねて人形遣ひの若竹東工郎と共に、江戸の旅興行に出てゐて、殆んど寢耳に水の状態で、素破こそとばかり歸阪して來たのだつた。そこで取り敢へず一派の人々を集め、北堀江市之側西側へ新たに芝居を開けて、座本豊竹此母の名によつて、明和三年八月に、豊竹派復興第一次興行の火蓋を切つた。即ちその陣容は「扇子合名月座舗」と題し、

新舞臺式三番叟、安倍宗任松浦登、梶原源太紅梅箴、双蝶々八、江戸土産富貴英。

と云ふ取合はせ、豊竹此太夫を座長格に、生駒太夫(後の二代駒太夫)、麓太夫、時太夫、八重太夫、三味線鶴澤十次郎、同名八、豊澤仲助、人形若竹伊三郎、東工郎、伊三郎、三十郎、友五郎その他。

さらにその翌四年正月三日初日で、こんどは座本豊竹此吉の名で、並木宗輔、豊竹應律等の合作「星兜弓勢鑑」を上演した。こゝでちよつと言ひたいことは、從來此興行を以て豊竹派再

興の第一回として知られてゐるが、私は前記三年八月の興行に新舞臺を壽ぐ「式三番」が出てゐることから見て、いづれが第一回興行か疑ひを持つてゐる。或は初めのは試みにやつて見て、第二回目に初めて組織的に名乗つて出たものかも知れない。然かし市之側西側芝居の新築されたのは三年八月の興行であることは間違ひない。

新たなる地盤と本據を得た豊竹派は着々その經營の歩みを固め、同明和四年十二月にはたうとう名高い産物を世の中へ提供した。それは即ちお染久松の芝居である、十五日初日、菅專助作、紀海音の袂の白綾を改作した「染模様妹背門松」で、お染久松の名作である。櫓下此太夫の質店、時太夫の油店、若竹伊三郎の久作、三十郎のお染、友五郎の久松といふ役割で、素晴らしい人氣を揚げた。この興行が果たしてどれほどの成績を揚げたか、それは數字によつて知るよしもないが、この興行の後、その芝居小屋の裏手へ、人形や衣裳その他の道具類を納める倉庫を建築することが出来たのだから、可なりな興行成績であつたに違ひない。さうして、その倉が、一時に有名になつて、世間の人々から「お染倉」といふ名譽ある名を頂戴して、淨瑠璃數寄者には、なつかしい思出の跡として偲ばれたのだから素晴らしい。この倉は明治年間まで残つてあつて、當時瓦屋橋の西詰にあつた油屋のお染倉と對照され、堀江と島の内に、一對

のいかにも大阪らしい淨瑠璃名所をのこしてゐたのであるが、今はもう二つともあとかたも無くなつてゐる。序でだからちよつと傍道へされるが、そもそも芝居の大入り大當りを祝ふ一つの表徴として、こんな風に倉を建てるといふ前例が、それまでも幾つもあるらしいが、享保十一年四月八日から、翌十二年閏正月末日まで、二年越し十一ヶ月間の大入を續けた豊竹座の、西澤一風、並木宗輔、安田蛙文等の「北條時頼記」にも、その大當り記念に、芝居小屋の隣地へ土藏を建て、祝つた、それを「北條藏」と稱されたといふことが記録に見えてゐる。その藏は後に火災で焼失したといふことであるが、芝居道で、由來大入り大當りの時を稱して藏入れと稱へ、小屋の前へ藏入れ轍を出すことなど、その例によるものだといふことである。

話はまた本筋へ還つて、この堀江市之側の芝居が次第に豊竹派の隆盛を見るに至つたと同時に、作者としての菅專助を得て、どれほど後世淨瑠璃界と歌舞伎界に貢獻するところがあつたかといふことは、次に擧げるところの藝題を見ればすぐわかる。現今でも歌舞伎芝居や文樂座の淨瑠璃でおなじみの狂言が、これから續々と現はれてくる。

明和五年十二月上演、菅專助作「助六揚巻紙子仕立兩面鑑」これは大文字屋の一段で著名なもの。また安永二年二月には菅專助、若竹笛躬合作「攝州合邦辻」が始めて上演され、合邦内

の場は此太夫、玉手御前を豊松重五郎、合邦を同彌三郎が勤めてゐる。同年四月、同じ合作で「伊達娘戀緋鹿子」お七の半鐘場が呼び物になる。同五年十月には菅專助作「桂川連理柵」、同六年三月「伊賀越乗掛合羽」近松東南作、尙また天明元年六月には「鎌倉三代記」が出る、これは作者不詳。寛政元年八月には菅專助、中村魚眼合作で「有職鎌倉山」、同六年十月近松やなぎ松助合作「日本賢女鑑」、享和元年十月近松やなぎその他合作「日吉丸稚櫻」が悉く書卸で上演されてゐる。こんな調子で、勿論享保や寛延頃の全盛には及ぶべくもないが、ともかく連続的に後世に残る狂言を出して、淨瑠璃史に又新なる光彩を點じたことは偉とするに足り、後人は以上の有名作に對して感謝の意を表して可なりである。

菅專助歿後だんだん不振、どうやらかうやら弘化の初年まで持ち續けて來たのである。

ところが此市之側芝居の豊竹派の外に、明和七年九月のこと、曩に没落した道頓堀の豊竹座の再興が企てられたことがあつて、座本豊竹此吉の名で、櫓下に豊竹島太夫、駒太夫、此太夫三人の名で「源平鴨鳥越」が出てゐるが、翌八年八月には、此太夫は矢張り分離して元の市之側の芝居へ歸つて引續いて興行をしてゐる。

そこで残つた豊竹座の連中は、座本豊竹和哥三、櫓下島太夫、駒太夫で、安永四年まで興行

を續けたが、約五年間で永續きはせず、座員は四方へ離散してしまつたが、凡そは市之側の芝居へ歸つたものが多かつたのである。此間に、後世に残る狂言を三つ上演してゐる。即ち明和八年八月、竹本三郎兵衛他合作「迎駕籠死期茜染」（島太夫の聚樂町）、安永元年十二月同作「艷容女舞衣」、同二年十一月作者未詳「櫻鏝恨較鞘」。

市之側芝居の位置は時代により、又再三の火災で其位置が移動し、その稱呼も區々になつて居り、前記西側の芝居の外に東側芝居が出来、後には堀江芝居（文久三年九月）の名の下に市之側大露路内に一本となつて現はれ、明治時代の堀江座（近松座派の前身興行場）に移つて行つたが、主として淨瑠璃の道場（歌舞伎も興行はしたが）として終始したことは淨瑠璃史上、道頓堀の竹本、豊竹兩座に次いで特記す可きものだと思ふ。尙ほ委しいことは郷土史「南北堀江誌」演藝之部に書いたから、それを参照されたい。

要するに義太夫節創立の殊勳者竹本義太夫の直接的な血脈をひいてゐた竹本、豊竹兩座没落後の淨瑠璃界は、もはや一人の傑出した人物が出なくなつて混沌たる状態をつゞけてゐた……天明……寛政……文化文政……と云つた世代の淨瑠璃界へ、こつりこつりと地面の下から小さな頭を擡げ出さうと活動し出したのが文樂座で、この文樂座と云ふ新しい操劇

場が遂に中央集權を握つてしまつて、完全に第二世竹本座の貫祿を具備することゝなり、それが現在に至るわけである。以下は即ち文樂座時代の項に於て述べることゝする。